

# ラフカディオ・ハーンと聖者伝説

銭 本 健 二

ハーンは一八九六年(明治二十九年)十二月に『アトランティック・マンスリー』(*The Atlantic Monthly*)に「生神」(“A Living God”)を発表し、この論文を翌年九月に出版された『仏陀の畑の落穂』

(*Gleanings of Buddha-Fields*)の巻頭に収めた。その中でハーンは日本の民間信仰のなかで、「何百年何千年のむかしに生き、愛され、死んでいった豪將、英雄、支配者、指導者の霊」が神として崇拜されていて、そうした田舎の神社の姿は、英語の“shrine”, “temple”といった言葉で想像される西欧的な「神殿」ではなく、霊や魂の宿る空間(家や部屋、洞など)と考える方が適切であると説明した後、実際に人間として生きた人が神として崇拜されるだけでなく、現に生きている人が神とされている日本の不思議な宗教形態に話を展開している。それらが主に村邑などの地域的な神社であると語った後、崇拜される者の特色を次のように指摘する。

- ① 賢者や勇者など偉大な業を行った者
- ② 大きな苦悩の経験をもつ者
- ③ 自ら死を選んだ者<sup>(3)</sup>

そのうちでも死後ではなく生前から生神として祀られる明治に起きた特異な例として紀州有田郡の百姓浜口五兵衛の物語を紹介している。人が神に祀られる信仰形態を堀一郎は「人神型」と呼び、「氏神型」と合わせて、日本の民間信仰の二大原型であり、この原型の重なりが、神道の発展や仏教の流入、国家宗教の形成にまで深くかわって来たことを論じている<sup>(4)</sup>。ハーンのこの着目は後に柳田國男の「人を神に祀る風習」や加藤玄智の『本邦生祠の研究』における生神の研究に、また死者をホトケと呼ぶ日本仏教特有の神性観を論じたエリオット卿(Sir Charles Eliot)の『日本仏教』(*Japanese Buddhism*)につながる先駆的着眼といえる。そしてこのテーマは宗教上の問題に限らない。その豊かな物語性の故に伝承文学の問題として大きな広がりをもっている。超人的な力や智慧によって、偉大な業をなしたものを英雄として祀ることは西欧にもあって、ギリシャ神話の英雄崇拜はその根源に日本と同じく死者崇拜の風習があったことはケレーニーの指摘するところだし、やがてキリスト教の護教的聖者の伝説につながる。また支配者の神格化はスウェーデンウスの

『ローマ皇帝伝』にみられるように、ローマ帝国において、大きな力をもったことが知られる。そしてハーンが二番目にあげている受苦受難の故の神格化はキリスト教の聖者伝の中心を形成する。そして日本において多様な芸能集団によって伝承された説教語りは式部伝説、俊徳丸、小栗判官など受苦の説話の豊かな伝統を含み、ハーンにもそうした伝承の聴書きが残されているが、それは別の章で論ずることとする。ヨーロッパでは紀元五世紀頃、聖ジェロオムによって、ギリシャ起源のいくつかの聖者伝がラテン語に翻訳され、ギリシャ古典の伝統とキリスト教世界が結びつけられた。そして後にジェノヴァの大司教となったヤコブ・デ・ウォラギネ (Jacobus Voragine) によって集大成された『黄金伝説』(『*Legenda aurea*』) に結実し、それを典型とし各国で多様な展開をみることになる。一神教のキリスト教世界において、人の神格化はありえないが、「神の証し人」として「聖列加入」(canonize)された人々があり、その伝記は教会によって公認された物語であり、教会暦の中に位置づけられ、教義の証人となる。それは自然に「聖なる神の平民」である庶民の伝承世界の中に溶けこみ、その重要なモチーフとなった。フランスの中世学者エミール・マールは次のように描いている、「聖者崇拜は中世の各時代を通じてその偉大な詩的魅力を投げかけている。聖者の像はいたるところに在った。町の城門の上に彫られては彼等は敵の方をにらみ、町を見張っている。フランスの古い家々の平面には、屢々教会の祭壇よりもよけいに聖者が並んでいた。ゴチックの大会、パリ、ルワン、トロワ等に於いては、往来は驚くべき様相を呈していた。一軒一軒の家が通行人に向かって聖者像の陳列を見せ

ていたばかりではなく、風に揺れる看板までが更にマルタン聖者、ジョルジュ聖者、エロワ聖者といったたぐいのものを加えて、聖者の数を増していた。家々の屋根の上に高く聳えている本寺といえども、それ以上の聖者を天空高く差し上げてはいなかったのである」<sup>(9)</sup> 本論でハーンの文学的生涯に従って聖者や教父の文学の系譜をたどることとする。

## ニュー・オリズズの聖教父

ハーンは一八七八年にニュー・オリズズから親友クレビエル (H. E. Krehbiel) に宛てて、教父アドリア・ルウケット (Père Adrian Rouquette) について次のように書き送っている。

教父ルウケットに関するあなたの情報は私には興味深いものでした。黒衣の教父の最後の人である彼は現在愛するインディアンたちと共にラヴィン・レ・カンヌにいます。しかし彼が帰って来られたらお会いして、あの御老人にあなたの手紙を読んであげるともります。もしよい雑誌のコラムが私にまかされたとしたら、私は彼の生涯——野にある不思議な人生——を小説に書くでしょう。シャトーブリアンの魔術的な作品に触発されて始まり、後には自分自身の不思議な美しい宗教への献身へと続くその人生。——『アタラ』(Atala) と『レ・ナッチェ』(Les Natchez) の詩的宗教だけでなく、孤独にのがれ、天そのものを円天井にし、そこに雲の壁画が描かれ、蒼穹の星という神の永遠の祭壇にまたたく蠟燭

に照らされる神殿をもつ荒野の宗教。<sup>10)</sup>

ここでは教父ルウケットは野の聖者とみなされ、ハーンはその聖者伝を書き残したいと願っているようだ。二人の出会いについては、E・L・ティンカー (Edward L. Tinker) の『ラフカディオ・ハーンのアメリカ時代』 (*Lafcadio Hearn's American Days*) に詳しい。それはまずルウケット師がフランス語のゴンボー方言で書いた詩「若きクレオール」の歌 (“Chant d'un Jeune Creole”) を「わがギリシャ系イギリス人の友人 L・Hへ」献ずることから始まる。それは二十連から成る作品で、その第一連をティンカーは次のように散文訳している。

貴兄の父君はイングランド生れなれど、母君はギリシヤの生れなり。御来駕願えるならば、わが友人バックリーが礼をもつてお供するであらう。<sup>11)</sup>

こうしてフランス文学を共に語り合う交友が生れた。先に引用した文中の『アタラ』はシャトーブリアンが一七九一年にアメリカ大陸を旅した時の経験をもとに新大陸へのロマン的憧憬を歌った詩的散文であり、インディアンのお僧長の口を通して語られるアメリカ大陸の原始林や大湖の風景を描いたフランスの前期ロマン派を代表する作品であるが、この『アタラ』(一八〇一年) にならって、老師が一八七九年に『新アタラ』 (*La Nouvelle Atala*) を発表すると、ハーンは早速二月二十五日の『アイテム誌』 (*The Item*) にそれ

を絶賛する書評を書いた。みごとな詩文なので英文で引用する。

... a creation inspired by the Spirit of forest solitudes, — a prose poem melodious as an autumn wind chanting a language, mystic and unwritten, through woods of pine. Fresh and pure as that unfettered wind, fragrant as wild flowers, there is a strange charm about this story unlike anything perhaps, except the magic of Chateaubriand...<sup>12)</sup>

この文章にはハーンのロマン的自然讃美とその自然につつまれた聖者の生活への憧憬が語られている。後年ハーンは東京大学で西欧の虫の詩について講じた時、自然の中の聖者の理想的な姿をアッシジの聖フランチェスコに見出している。

キリスト教世界には一見すると仏教に奇妙にも似た姿勢で全自然を考えていた一人の聖徒——キリスト教の全聖徒列伝中最も魅力ある人物——がいる。その聖徒とはアッシジの聖フランチェスコで、十二世紀後半の生れであったことから、中世のただ中——キリスト教史上最も迷信がびこった時期——に生きた人物と言えよう。ところでこの聖徒には樹木や岩石に、まるでそれらが生きものでもあるかのように語りかける習慣があつた。彼は太陽に「わがはらからなる太陽」と語りかけ、月を自分の姉妹であるかのように話した。彼は、人間に対してだけでなく、鳥や魚にも説教し、それらを主題とした詩を作ったが、どれも不思議なあどけない美しさを湛えていた。たとえばヤマバトへの垂訓詩は「わが幼き妹

ら、ヤマバトよ」という句で始まるが、詩の中では、その垂訓からヤマバトたちの姿が八聖霊Vの化身または象徴であることを思い知らされるようになっていく。(伊東東一訳)

先の書評において「松の森を吹きぬけながら言葉を唱える秋風のように調べ豊かな」と形容したところに、こうした聖者の姿を読みとることは困難ではない。

さてハーンのニュー・オリンズ時代(一八七七年十一月—一八八七年六月)は文芸記者、編集者としての名声が確立し、ハーンの文学的教養の基礎ができあがった時である。フランス文学の翻訳、世界の民話伝説の研究と再話、クレオール民俗や伝承の採集、旅行記や時事的記事、文学評論の執筆など、それぞれの領域が確かな方法と基礎の上に立つてなされるようになった。そして一八八五年に若き中尉オスカー・クロスビー(Oscar T. Crosby)を通して、スペンサー哲学という彼の生涯の思想的支柱をえたこともあげられる。来日した後の彼の著作の領域と方法がすべてこの時代に出そろっているといえる。

フランス文学の翻訳は百八十七編に達し、なかでもロマン主義作家と自然主義作家のものが多く、ゴーチエの『クレオパトラの一夜その他』(*One of Cleopatra's Nights and Other Fantastic Romances*)が一八八二年に出版された。そして彼の死後一九一〇年に出版された『聖アントワヌの誘惑』(*The Temptation of St. Anthony*)を一日三十分でも毎日続ければ大きな仕事になると信じてこつこつ翻訳していったのもこの時期である。フローベールには

この他に聖者伝に取材したものがあつて、『三つの物語』のなかに「聖ジュリアン」があり、ハーンが深く愛好した作品であつた。前者は悪夢の百科全書的作品であり、後に東京大学で「小説における起自然的なものの価値」(“The Value of the Supernatural in Fiction”)と題する講義で、自身の翻訳したゴーチエの短編を解説しながら「この夢の経験の芸術的利用」(this artistic use of dream experience)を説くように、ハーンの夢文学の系譜を形成することになる。後者は翻訳はされなかつたけれど、伝説の芸術的昇華の作法を示す典型的な作品として後にふれるようにハーンの再話文学に直接の影響を与えることになる。

一八八二年十一月二十四日のワトキン宛の手紙で、ハーンは東洋の伝承文学に没頭している様子を次のように書き送っている。

私は今東洋の伝説の蒐集に忙しくしています—バラモン教、仏教、タルムード、アラビヤ、中国、ポリネシアのものです。春になったら仕上げたいと思っています。スクリブナー社かオズグッド社から出せると思います。<sup>10)</sup>

二年後の一八八四年になって、ハーンの希望通り、ボストンのオズグッド社から東洋の伝説集『異国文学遺聞』(*Stray Leaves from Strange Literature*)は出版された。ここに含まれた二十七編の再話作品は、東洋の教典や神話、宗教的伝説にもとづく、宗教文学であることで、一八八七年に出版された『中国怪談集』(*Some Chinese Ghosts*)とその趣を異にする。その翻訳および再説の手法について、

ハーンが少々得意になつて「解説」(“Introductory”)の中で語り、  
いわずその手の内を見せているが、それをまとめると次のようにな  
る。

- ① 主題も別々の複数の素材を一つの物語に「溶接した」  
(welded)。

例…ポリネシア神話による「泉の乙女」、アラビアの伝説「愛の  
伝説」

- ② ひとりの人物に関する複数の伝説をつなぎ合わせる。

例…『タルムード』に基づく物語

- ③ 正確な逐語訳

例…『カレワラ』による歌

- ④ 物語の構成や効果を考へて自由に挿入や削除を加へて仕上げ  
る。

例…仏教文字による物語

来日後、日本の物語や伝説、日記や資料を扱う上で、この四つの  
作法は変らなかつたと考へてよい。それぞれの作法において実に厳  
格であつたけれど、どの作法によるかは彼と素材との自由な関係に  
よつて決まるのであつて、それはあくまでも彼の想像力の問題で  
あつた。

この宗教伝説集の中には厳密な意味での聖者伝説は見当らないが、  
同じ時期に書かれた多くの小品のうちには、「聖ブランドンのクリスマ  
ス」(St. Brandan's Christmas)と題された美しい聖者伝がある。  
これは一八八二年のクリスマススイヴに『タイムズ・デモクラット誌』  
(*The Times-Democrat*) に発表され、現在『アメリカ雑記』

(*Miscellanies*) (一九二四年) に収められている。この聖者伝はも  
と十三世紀の中葉にグロスターの修道僧たちによつて蒐集された  
『南部英語聖者伝集』(*The Southern English Legendary of  
Sains*) に含まれている。ケンブリッジ版英文学史によると、「これ  
に含まれた伝説のなかでもっとも魅力に富むのは、セント・ブレン  
ダンの話である。この聖者は伝説的な航海者のひとりであつて、い  
わばキリスト教的なユリシースあるいはシンドバッドであり、事実、  
とくに後者とは強い類似性をもっている。なかば記憶に残る遠い昔  
の民族的海上冒険が、ここでは、この世の楽園を求めて航海を続け  
るキリスト教の聖者の物語となつてあらわれているのである」<sup>60</sup>。ハー  
ンも東京大学で英文学史を講義した時、「古代英語宗教詩」(*Old  
English Religious Poetry*) のなかで五つの聖者伝『聖エレメの  
伝説と生涯』(*The Legend or Life of St. Elene*) 『聖ジュリア  
ナの伝説と生涯』(*The Legend or Life of St. Juliana*) 『聖アン  
ドレアの伝説と生涯』(*The Legend or Life of St. Andreas*) 『キリ  
スト伝』(*Crist*) をあげ、簡単な解説をしている。その中で特に聖ア  
ンドレアについて、「最も興味深いのは、多くの海ゆく者たちの生涯  
を取り扱い、私たちに古代のバイキングの生活条件を説明してくれ  
る」と述べている。さてハーンの美しい文章を紹介しよう。「西方の  
海の陽光に満ちた波に洗われて、永遠の静けさのうちにある祝福の  
島」(*the Blessed Island which lies in perpetual calm, bathed in  
the sunny waves of the Western Sea*) を求めて船出する聖ブレン  
ダンと兄弟である修道僧たちが、クリスマス・イヴに、北海の遙か

遠く、この世の果てに至って、氷の山々の間に、地獄の門が口を開け、罪の故に地獄に墮ちる魂たちの呻吟する様を描き、やがてクリスマススの夜明けと共に神の栄光を讃美することで終っている。小品ではあるが、ディケンズの『クリスマス・キャロル』と同じく、暗い夜の夜が最も深まり、読む人を懺悔にいだなうイヴ文学の伝統に沿い、また「海の楽園」(Ocean Paradise)のテーマはやがて来日後も浦島伝説に取材した「夏の日の夢」(“The Dream of a Summer Day”)につながって、ハーン文学の中心を形成する。またコーレルツの『老水夫の唄』(The Rime of the Ancient Mariner)の「霧と雪の島」(the land of mist and snow)にみられるようなロマン派詩文学特有の崇高美の絵画的表現もある。英文を引用する。

Meanwhile, being far up in the Northern Sea, the night was full of the awful noises of crashing ice, and ghastly mountains drifted past and dashed together in the shadowy mists. Thereafter came a great flame, as of a mountain burning, then clashing of chains and cries of despair over the wan water.<sup>80</sup>

ハーンはここで、中南部のアメリカに住む人々に、北海の崇高な美を描いて、イギリスの海を懐かしがらせる、文学者として彼が読者に贈るクリスマス・プレゼントである。

その他には、一八八五年八月二日の『タイムズ・デモクラット誌』で、イスラムの聖者伝に関して、口承文学を蒐集したフランス人将校トルメル大佐 (Colonel Trumelot) の業績を讃えながら書かれた

「マアダイの聖者加入」(“The Canonization of the Mahdi”)がある。イスラムの聖者伝の伝承は十五、六世紀までしかさかのぼることができないが、今世紀でも人々の生活の中に生きていて、その伝承の基盤として、瞑想をはぐくむ広大な孤独の地にある沈黙の生活と老年と生きた智慧への崇敬であると指摘している。そしてこうした聖者の伝承が現在のイスラム社会の政治を動かしていることをマハダイの聖者加入に見ている。<sup>81</sup>

またヨーロッパの伝統的な行事である万聖節が新大陸アメリカに定着したことについて、一八八二年十月三十一日(万聖節の日)に同誌に書いた短かい記事「万聖節」(“All Saint”)がある。「本の頁の間にはさまれた押花<sup>82</sup>」のように保たれた死者たちに捧げられた愛の信仰、穏やかな記憶の香り、生命と美の儚さの感覚がこの伝統を守り伝えていと述べ、民間伝承を支える宗教感情について言及している。

### マルティニークの教父伝説

ニュー・オリンズの町で、芸術を愛する人々のサロンに加えられたハーンは文学や美術音楽の世界に没頭してゆくが、なかでも古代宗教や祭式、また神話文学は彼が最も愛好した領域であった。そうした興味を集中して伝えている最初期の手紙は一八七八年のクレヴィエル宛のもので、古代の楽器について語るついでに、ローマの境界の神ターミナスの像を詳しく説明し、児童用の読み物だがと断りながら、キングスリーの『英雄たち』(Heroes)に言及している。<sup>83</sup>

またアイルランドその他のケルト神話について同じ年の手紙に含まれる歌謡について語り、インドのシヴァ神について詳しく解説している。<sup>84</sup> なかでも一八八三年のクレヴィエル宛の手紙にみられるトマス・カイトリー (Thomas Keightly) の『妖精神話』(The Fairy Mythology) は富士大学のハーン文庫にも収められていて、(これは来日後購入されたものではあるが) ハーンの神話や伝承文学の比較研究の基礎になった文献である。カイトリーはハーンと同じアイルランド人であり、その『妖精神話』の初版は一八二八年に著者名なしで出版され、一八五〇年に大幅に増補され、その豊富な資料と共にヨーロッパ全体を視野においた伝承文学の比較研究の端緒をなす業績であり、その多面的な分析は今でも読むに耐える。こうしたハーンの伝承文学研究への情熱に格好の素材を提供したのは一八八六年に訪問したマルティニーク島である。そして成ったのが『マルティニーク・スケッチズ』(Martinique Sketches) 中の「幽霊」(Un Revenant)の一篇である。このタイトルはマルティニークの島の別名の「帰郷者の島または幽霊島」(La Pays des Revenants) から取られているが、その名の示す通り、マルティニークは豊かな伝説の島である。永遠の不安という呪いで海を呪った神父ピオの伝説、実際は善良な老人だった人が大風と結びつけられて、「ボンさま」(“Missie Bar”)と恐れをもって語り伝えられたりした。そこでハーンはこの島で伝えられる「教父ラバ」(Père Labat)の伝説の虚実にメスを入れ、その伝説化の過程を明らかにしようとしている。まずその伝説との出会いの場面をみてみよう。

私はガイドといっしょに山歩きから帰る途中、アジュエパ・ピュロンの道を通る頃、太陽もすっかり落ち、西空に血のように赤い夕焼が残っていた。その空を背に山々のシルエットが何とも言えず柔かい、黒いビロードのようになり、董色の大気を通して星がまたたき始めた。突然私は近くの丘の中腹にあたるところで、昼間見た時、竹や木のやぶそしてカンナの繁った明らかに人の住めない荒れた場所に、黄色い明りが点のように素早く動いているのに気付いた。ガイドも私と同時にそれを見て、十字を切り叫んだ、「教父ラバのランタンに違いない」<sup>85</sup>

この出来事をきっかけに、「マルティニークの民間伝承 (folklore) のなかで最も印象的な伝説」である教父ラバの伝説を調査することになった。そして次のような手順でその第一資料にまで到達する。

① 情報提供者テレザ婆さん (old Tereza) の話と他の人による確認。

内容：何百年も前にこの島に奴隷をもちこんだその罪滅ぼしに帰っている。

② アジュエパ・ブイヨンの近くの農場で異説 (variation) を集める。

内容：ヨーロッパに帰ったのではなく大蛇に噛まれて死んだ。

③ 友情町のインフォーマント、mam・ロバート (Mann-Robert) により全く異った話 (version) を聴き、数人によって確認。

内容・島の人の虚言によって非難追放された僧の呪い。

④ モルンドランジュの紳士M氏の実見談と解釈。

内容・逃亡黒人説

⑤ ルフツ博士(Dr. Rutz)の著書『統計的歴史的研究』という同

島に関する歴史書における詳細な歴史的記述。

内容・一六九三年八月二十四日に上陸したドミニコ教団の半僧

平民の人、当時三十才：一七三八年パリで没。七十五才。

⑥ 海軍記録保管所の古記録中のヴォークレッソン知事宛の政府書簡一通——マルティニーク史家アドリアン・デザルズ氏の調査。

内容・教父ラバの植民地への再移住の拒否。

⑦ 教父ラバ自身の著書『アメリカ諸島新航海』(Nouveau voyage aux Isles de l'Amérique)の詳細な紹介。

以上の民俗学的調査をした後、ハーンは教父ラバの伝説を次のように結論づける。

以上のようなこと「土地の迷信」を信じ、また太陽が地球のまわりをまわるのか、地球が太陽のまわりをまわるのかも決めかねる人ではあつたが、教父ラバは当時の平均的な宣教師よりひどく妄信的だったとか無知だったとかいうのではなかった。他の事にかけては実際の聡明さと世俗的な合理主義と実践的な抜け目なさをもっていたことと比較してみると、彼の迷信的素朴さが人々には奇妙に思えたというにすぎない。そして「時」のアイロニーは時々何と奇怪なことになるのだろうか！このドミニカ僧が達成したあら

ゆるすばらしい仕事は人々に忘れられ、彼が戦つたはずの魔術が生き残り、大いに栄えている。しかも彼の名前は迷信と結びつかずにはめつたに口にされることはなく、黒人の間では、ゾンビと地霊の信仰という迷信の力でだけ残っているとは、「こらー言うことをきかないとラボット坊さんに連れに来てもらうよ」<sup>⑧</sup>

そしてこの教父ラバの伝説化の背景に、キリスト教の宣教と土着の宗教感情との混淆があることを一章をあてて説明している。そしてマルティニークの熱帯の風土の中に溶けこんだ十字架や聖像のおよそ芸術的とは言えないものの中に、エミール・マールがヨーロッパの中世の街に詩を発見したようにハーンは詩を見出す。英文で味わうべき文章である。

Yet there is a veiled poetry in these silent populations of plaster and wood and stone. They represent something older than the Middle Ages, older than Christianity — something strangely distorted and transformed, it is true, but recognizably conserved by the Latin race from those antique years when every home had its beloved ghosts, when every wood or hill or spring had its gracious divinity, and the boundaries of all fields were marked and guarded by statues of gods. <sup>⑧</sup>

そして伝説を生むまでに土着化したキリスト教が白人黒人の人種のみぞをかけたわす一定の役割を演じていたのである。しかし黒人



や有色人に選挙権が与えられ、白人クリオールが政治からしめ出される新しい政治情況が生れつつあって、キリスト教による古い宗教的統合が守れない事態をハーンは危ぶんでいる。白い教父ラバの伝説も滅びようとしている。ハーンは失なわれようとする古きものの夢をマルティニークの「永遠の夏」のなかで挽歌のように歌っている。この姿勢は「古き日本」(Old Japan)に向う時と同じである。

## 日本の仏教説話

富山大学のハーン旧蔵図書を見ると、内外の伝承文学についての文献がかなりの数にのぼっているのがわかる。主だったものだけをあげてみると、フランス語関係では、アンジェロ・ド・グベルナテス (Angelo de Gubernatis) の『植物神話と植物界の伝説』 (*La Mythologie des plantes ou les légendes du règne végétal*) はハーン文学における植物神話・伝説の系譜を支える書物である。そして何よりも一八八一―九二年に刊行され、フランス語圏において、当時最大の伝承文学の蒐集でもある『世界の伝承文学』 (*Les Littératures populaires de toutes les nations*) は全三十巻中二十四巻を所有していた。アイルランド関係では、エリノア・ハル (Eleanor Hull) の編集した『アイルランド文学におけるクフォーリン伝説』 (*The Cuichulinn Saga in Irish Literature*) があり、W・B・イエイツ (W. B. Yeats) のアイルランド伝説に取材した詩集『葦間の風』 (*The Wind among the Reeds*)、そして『アイルランドの調べ』 (*Irish*

*Melodies*) を含むアイルランドの詩人トマス・モーア (Thomas Moore) の詩集などが目につく。アイルランドにおける伝承文学の蒐集と研究は一八八〇年代から飛躍的な進展をみせることになるが、伝承文学蒐集の歴史をふりかえってみると、一八二〇年代の後半、クロフトン・クローカー (Crofton T. Croker) の『アイルランド南部の研究調査』 (*Researches in the South of Ireland*) (一八二四) と『湖水の伝説』 (*The Legends of the Lakes*) (一八二九) があり、また編者不明の『古代アイルランド物語集』 冬の宵、農民によって語られた物語集』 (*Ancient Irish Tales, A Collection of the Stories Told by the Peasantry in the Winter Evenings*) (一八二九) など、ドイツにおけるグリム童話の集成がそうであったように、マックファーソン (Macpherson) の『オシマン』 (*Ossianic Fragments*...) (一七六〇) やスコットの作品など、イギリスロマン派文学の影響下にあった時代をその端緒としている。それ以後三十年代のサミュエル・ラバー (Samuel Lover) の『アイルランドの伝説と物語集』 (*Legends and Stories of Ireland*) (一八三四)、四十年代に、ホール夫人 (Mrs. Samuel C. Hall) の『アイルランド農民の物語集』 (*Stories of the Irish Peasantry*) (一八四〇)、五十年代に、ウィルズ卿 (Sir William Wilde) の『アイルランド民間迷信』 (*Irish Popular Superstitions*) (一八五三)、六十年代から七十年代にかけて多くの仕事を残したのは、パトリック・ケネディ (Patrick Kennedy) の『アイルランドの炉辺物語』 (*The Fireside Stories of Ireland*) (一八七〇) はその代表作である。また「ラゲニエンス」 (*Lageniensis*) の名で『アイルランドの民俗―地方の伝統と迷信』

(*Irish Folklore: Traditions and Superstitions of the Country*)

(一八七〇)などの蒐集があるジョン・オハロン (John O'Hanon)へと受け継がれ、やがて八〇年代の 아일랜드 民族独立運動と結びついて、伝承文学はアイルランド文芸復興運動の核を形成することになる。民族主義者ダグラス・ハイド (Douglas Hyde)の莫大な蒐集と英訳、民話の宝庫であるアイルランド西部地方の蒐集をまとめた劇作家グリー夫人 (Lady Gregory) 、そして W・B・イェイツの多くの作品もその運動の中で形成された。こうした動きよりも別に伝承文学にとつてもう一つの重要な出来事があった。それは一八七八年に創立された『民俗学協会』(The Folk-Lore Society)の活動である。先に述べたエレーナ・ハルも同協会の機関誌『民俗学』(*Folk-Lore*)で活動した研究者である。その協会の活動と『民俗』の含む研究領域について、創立趣意書の冒頭で次のように定義する。

This Society was established in 1878 for the purpose of collecting and preserving the fast-perishing relics of Folk-Lore. Under this general term is included Folk-tales; Hero-tales; Traditional Ballads and Songs; Place Legends and Traditions; Goblin-don; Witchcraft; Leechcraft; Superstitions connected with material things; Local Customs; Festival Customs; Ceremonial Customs; Games; Jingles; Nursery Rhymes, Riddles, etc.; Proverbs; Old saws, rhymed and unrhymed; Nick-names, Place-rhymes and

Sayings; Folk-etymology. ⑧

ハーンが日本のさまざまな民俗に深い関心をもち、熱心に蒐集し、意欲的に発表した背景には、英国における『民俗学協会』の活発な活動があったことが推測できる。一八九〇年十月のチェンバレン宛の手紙で、出雲大社で使われる火錐の模型を送ったことを伝えた後、松江で行った教育講演「教育上に於ける一要素としての想像力」(“The Value of the Imagination as a Factor in Education”)の中で、いずれも同協会の副会長であるエドワード・タイラー (Edward B. Tylor) とラボック卿 (Sir John Lubbock) に言及したことを報告している。⑨ ちなみに会長はアンドリュー・ラング (Andrew Lang) である。この手紙は同年九月三十日付のチェンバレンの手紙に対する返書で、チェンバレンはそこで「オックスフォードの古物研究家 (antiquarian) 老タイラー博士のためにも『お守り』 (Mamori) は大いにいたきたいし、他の『頑迷な信仰と霊験のオブジェ』 (object of bigotry and virtue) もいたきたい」と依頼している。⑩ 一八九一年四月二十三日の手紙で、ハーンより送られた火錐をタイラーのもとに送ることをつげ、この神聖なオブジェはあらゆる敬意をはらって取扱われ、注意深くオックスフォード博物館のしかるべきりっぱな場所に運ばれるでしよう」と礼を述べ、合わせてハーンが送った珍しいお守りも合わせて送るむね伝えている。⑪ 同年八月十九日の手紙でも、タイラー博士から「神道の火錐」(the Shinto fire-drill) を心待ちにしているという便りを受けとったハーンに連絡している。⑫ 他にハーンは精霊船も送っている。⑬

一八九一年八月のハーンの手紙は大きな期待に満ちたものである、「タイラー博士と人類学研究所に関して申しそえます。もし同氏が私が提供しうる論文を望んでおられるなら、彼に喜んでいただくことは私の喜びでもあり、光栄とするところでもあります」と伝え、チェンバレン教授に仲介の労を願う口ぶりがみえる。確かに同協会の創立趣意書で第二の目的としてこの新しい学問が各国に広がることをあげている。そしてイギリスだけではなく、インドと中国に支部を置いて、海外の民俗蒐集に積極的であった。その中心がオックスフォードの人類学研究所である。

一八九一年一月から翌年にかけて、チェンバレンはマニラ経由で英国に帰国する。そして九二年の六月二十一日にハーンの提供した資料によって人類学会で講演を予定していることを五月五日にロンドンから次のように書き送っている、「オックスフォードは私が最も楽しい思いをしている所です。私はタイラー御夫妻の家に滞在し、その訪問の結果の一つが六月二十一日人類学会の席で主にあなたの手紙が提供してくださった材料によって、講演することになりました。火鉢は無事オックスフォードの大学博物館の一部門であるピット・リヴーズ博物館におさめられました。そして大へんに喜ばれました。…多くのあなたのお符は私が伊勢と高野山その他で集めたいくつかといっしょに講演で展示します」その他チェンバレンはハーンがあれほど敬意をいだくマックス・ミュラー (Max Müller) との交友と軽々しい社交裡での人物評価など、素人ではないハーンにとっては羨望に目くらむことを得意気に書き送っている。そしてハーンは一八九三年一月十五日付の手紙で、「もし出版社が承

知しないことがわかれれば、あなたのお好みの原稿を御指示のような仕方御用に供するつもりです。私はいつか協会 (the Society) の会員となる日を考えてきましたが、私の本が出版されるまで待ちたいと存じます」と民俗研究者としての屈折した熱望を伝えている。

チェンバレンはこの講演の内容を一八九二年人類学研究所雑誌 *Journal of the Anthropological Institute of Great Britain & Ireland* vol.22 に「日本のいくつかの小さな宗教習俗」(“Notes on Some Minor Japanese Religious Practices”) として発表している。ここで伝承文学から民俗学一般との関連にまで言及したが、バラッドについてもハーンが深い関心をもっていたことについては別の機会に考えてみたい。

ハーンの蔵書には日本の説話関係書が豊富である。『今昔物語』、『古今著聞集』、『沙石集』、『十訓抄』、『骨董集』、『古今妖魅考』、『玉すだれ』などの古典だけではなく、さまざまな百物語もの、奇談、奇聞、畸人傳、諸国、怪談ものと百冊をはるかに越える蒐集で、小泉節子の『思出の記』にみられるように、ハーンの日本説話伝説への傾頭ぶりは驚くべきものがある。

ハーンの物語文学を考えると、マックス・リュティが「昔話」(Marchen) と呼んでいるものは案外少なく、むしろほとんどが「伝説」(Legend) の中に入れるのが適切であろう。リュティによると、昔話は事物、人物、事件などあらゆるものが昇華作用 (sublimation) を受けて、現実の重みを失ない、人の心の夢に限りなく近づく「願望の文学」であるのに対して、伝説は恐ろしい出来事、不快な出来事を時間に厳密に従って、ストレートに語る報告であり、

不気味で破壊的な力があらゆる方向に向って働く世界を提示する。<sup>40</sup>

ハーンの再話ものに子供向けの童話を期待する人がしばしば当惑するのは、時に血みどろの復讐譚を描ききっているのに出会うからである。節子夫人が、ハーンが最も好きだったと伝える「浦島太郎」<sup>41</sup>

に合わせて「養老伝説」もとりにこんで語る名篇「ある夏の日の夢」

(“The Dream of a Summer Day”) のようなメルヘンそのものである作品は少ない。長谷川弘文堂から明治十八年八月頃から出はじめた英訳『日本昔話シリーズ』(Japanese Fairy Tales Series) が、他の人の手で明治二十五年十二月までに二十一冊が一応完成するといった事情があるにしろ、ハーンの想像力の質が「昔話」より「伝説」を選んだと考える方が適切であろう。そうした伝説の中で聖者・教父伝説につながる作品をたどってみたい。仏教説話と聖者伝説の厳密な照応などありえないが、宗教伝説という大きなわくの中でハーンの想像力にどんなものが触れたかを中心に考えることにする。

来日するとすぐ、真鍋晃という通弁を連れて、日本の寺院を訪ねまわるが、彼から弘法大師の話の聴き、それを「弘法大師の書」(“The Writing of Kobodaiishi”) にまとめた。平仮名という表音文字を教えたという大師の書にまつわるいくつかの奇跡譚を伝えるハーンの筆は力強く、筋も簡潔な運びで、荒々しい行動がみなぎって、口承の調子をよく伝えている。手足と口に五本の筆をもつて縦横にふるえば、たちまちに美しい文字となったり、川向うから勅使のかかげる額に文字を写す大師の豪快な姿を読者に想像させる。また字の悪口を言った者に夢の中で血の出るまで打ちかかる力士や秋の文字の狂暴な業、ぼろを着た童子と書競べをし、その童子が光輝く文殊菩

薩になって昇天する奇跡譚などその素朴な味わいを伝える。そして

土臭いグロテスクなまでのユーモアの調子は、日本の伝説を取扱う時、ハーンがねらう効果の一つである。「食人鬼」(“Jikininki”) で

は夢窓国師が登場し、死骸をむさぼり喰う鬼となった僧の霊に救いを与えるが、その話は誠にグロテスクだし、「死骸に乗る人」(“The Corpse-Rider”) では、陰陽師から、死んだ妻の霊を静めるため、そ

の死骸の上に馬乗りになることを指示された男の一夜の狂乱ぶりが描かれ、それは街角のパンチ人形の芝居のような動きの激しさがあ

り、グロテスク・コメディそのものである。「果心居士の物語」(“The Story of Kwashin Koji”) はそうした豪快な僧侶の典型を描き出す。

常に諸国を行脚して、野に屍をさらし捨てる者もない横死者行路病者の骨を拾い、河原に集まる人々に地獄絵図を掛け広げ、因果の理を

説く聖たちの世界、唱導文学の特質を十分に伝える。そして時の権力者への反抗ぶりも痛快である。「天狗譚」(“Story of Tengu”) で

は一羽の鷹を助けたことで天狗から釈迦の大法会に列する夢がかなえられるが、沈黙のタブーを破ってしまった上人の話であるが、

思わず声を発してせつかくの夢が破れるという夢の体験にもとずいて、その破れた夢のあらわさを笑いがおさめる。「ろくろ首」

(“Rokuro-Kubi”) では、武士あがりの遊行僧回竜が法衣の袖に喰いついたろくろ首をぶらさげて悠々と歩く姿にみられる怪異でグロ

テスクなユーモアをハーンはことさらに強調しているところがある。古本屋で「狂歌百物語」を掘出した時、日本の説話にみられるこの

怪異とグロテスクなユーモアについて、「不気味な主題をもてあそぶ

フッド(Hood)の怪奇な才知を思わせるものがある。恐ろしいもの

と諧謔味を混ぜ合わせる日本特有の方法」であると言っている。聖者伝説は教会によつてはつきりと公認された目的をもち、殉教と奇跡を核に組立てられているが、説話の僧侶たちは民衆の生活の中に溶けこんで、怪異な世界を民衆のたくましい想像力と結びつけ、それを現実根づかせる。そこに恐怖に拮抗しうる野性的なユーモアの力が生れる。

以上のような特徴をもつもの以外にも、「聖ブレンダンのクリスマス」のように、地獄のような髑髏の山を見る巡礼者の夢を語る「断片」(“Fragment”)、性空上人が遊女の舞い姿のなかに普賢菩薩の化身を見る奇跡譚「普賢菩薩の伝説」(“A Legend of Fugen-Bosatsu”)そして「興義和尚のはなし」(“The Story of Kogi the Priest”)は、秋成の「夢応の鯉魚」の豊かさには較ぶべくもないが、芸術譚的要素とハーン好みの水の夢が過不足なく溶けあっている。

仏教説話にも聖者伝にも共通している物語は、自分の犯した重い罪に目覚め、聖職、仏門に入るといふモチーフをもつ作品である。ハーンの中には「日本海に沿うて」(“By the Japanese Sea”)の中で語られる出雲の民話と有名な「おしどり」(“Oshidori”)の二篇がある。出雲の民話では、貧しさ故に生れた子供を川に流して殺しつづけたある百姓が、裕福になつて七人目の子供を育てたところ、月の美しい晩にその子が捨てられた子のうらみを口にし、それきり口をきかなくなつたと言ふ。「この百姓は僧になつた」と結ぶのは説話のコンベンションである。聖者伝はその後の奇跡的偉業を語る。フローベールの『聖ジュリアン』もそうであるが、殺生の罪に目覚める場面の劇的な展開は平川氏の指摘する通り、「おしどり」の中に

はつきりと影響することになる。村允の夢に現われ、激しく罪を糾弾する女の姿は、聖者伝から流れこんだ西歐的感覚であつて、日本の説話とは無縁である。村允の目前で自刃する雌のおしどりの姿も西歐人が描く観念的な日本婦人像に思える。特に畑山勇子を讃えるハーンにとつてはそうであつたらう。十九世紀末はフローベルだけではなく、詩人や小説家はその素材を聖者伝に求めている。ヴィリエ・ド・リラダンの作品集『新残酷物語』の中の『修道女ナタリア』、ユイスマンズの聖リドヴィナの奇跡を主題とした『腐爛の華』をはじめ、カトリックの聖者列伝ともいえる『大伽藍』、『出発』などすぐれた成果がある。

## 結 び

前世の記憶を語り、その真実が実証されたという江戸時代の記録「勝五郎再生記」(“The Rebirth of Katsugoro”)の正確な翻訳を思い立つた。ハーンの記憶についての宗教的思索をここで追ふことはしないが、それがただ奇跡的な出来事への興味からだけでなく、勝五郎が「おれは仏さまだ」と言うような「生神」の民間信仰の姿と日本人の祖先観を知るよい資料と考えたからである。柳田國男が晩年の大作「先祖の話」(昭和二十年)の第七十九章「魂の若返り」の中で、「江戸の閑人たちに騒がれた勝五郎再生談」に触れているが、『先祖の話』が外国人の日本宗教研究を念頭に敗戦前夜に書きつがれたこと考えると、ハーンのこの翻訳も柳田の意識にあつた仕事であつたと思われる。柳田はこの再生記を解釈して、先祖崇拜を守る庶民の間

に「もしかすると遠い先祖の霊が立ち返つて、宿っている」かも知れないという意識がひそんでいたからだという。ハーンは大乗仏教の教義によつて、「もしそれが私たちそれぞれの中にある『無限の全我』(the Infinite All-Self)であれば、『ジャータカ』の全体を何の困難もなく信じられる」と語っている。「生神」のなかで日本人の口をかりて、「すべの心の一致という教義」と理解したのと同じく、ここが大乗仏教の普遍的靈魂観に対するハーンの一貫した信仰を見ることが出来る。そしてそれがこうした聖者伝が表わす仏教的教義であると聞いたそうである。

## 【註】

引用したハーン作品は主にタトル版と全集版により、それ以外は出版社、出版年を示した。

- (1) ハーンが「生神」に初めて言及したのは、一八九〇年十月六日のチェンバレン宛の手紙であり、「生神」(Ikigami)が所属する千家家と書いている。
- (2) この題名はヘンドリック宛一八九七年十一月の手紙で、はじめ「生神およびその他の研究」とする意向を語っているところをみても、この研究がこの本の中心となる重要なものだったと考えられる。

(3) *Gleanings in Buddha-Fields*, pp. 11—12.

- (4) 『日本宗教史研究Ⅲ——民間信仰史の諸問題』(未来社、一九七一年)五三—六五頁。ハーンは「生神」の第二章全体をみて、日本の村落共同体を形成したものに、明文化されないが法的力をもつ慣習(Customs)があつて、倫理や産業だけでなく宗教行為もそれに含まれる、とし、共同体内の宗教儀礼を説明しているが、これは堀一郎が「氏神型」と呼んだ内容である。

- (5) 『定本柳田國男集』第十卷(筑摩書房、昭和三十七年)所収。
- (6) 『ギリシヤ神話——英雄の時代』(中央公論、昭和四十九年)二二—四三頁。

(7) ヘルティエ、アザール共編『フランス文学史——中世文学上』(創元社、昭和十七年)二二—三十八頁参照。

(8) 『黄金伝説の第二、二巻』(人文書院、一九七九、一九八四年)参照。

(9) ヘルティエ、アザール、前掲書、三十一—三十一頁。

(10) *The Writings of Lafcadio Hearn*, vol. XIII, pp. 180—81.

(11) *Lafcadio Hearn's American Days* (N.Y.: Dodd, Mead and Co., 1924), p. 144.

(12) *Ibid.*, p. 145.

(13) "Some Poems about Insects", *On Poetry*, (Tokyo: The Hokuseido Press, 1941) pp. 413—4.

(14) John Erskine ed., *Talks to Writers* (N.Y.: Dodd, Mead & Co., 1948) p. 146.

(15) *Letters from The Raven* (N.Y.: Brentano's, 1907) p. 81.

(16) 正しい綴りは St. Brendan の綴り。『The Penguin Dictionary of Saints』よると四八六(推定)——一五七八年に実在した司祭が「航海者ブレンダン」と呼ばれ、十世紀には「ブレンダンの航海」(Brendan's Voyage)とつづき、有名な流布本をもち、アトランティック大陸の伝説と約束の地の神話と結びついて伝説化した。(p. 73)

(17) 『ケンブリッジ版イギリス文学史Ⅰ』(研究社：一九七六年)七十五頁。

(18) *A History of English Literature* (北星堂書店：昭和五年) p. 31.

(19) *Miscellanies* (London: Heinemann, 1924) vol. II, p. 43.

(20) *Ibid.*, p. 44.

(21) *Occidental Gleanings* (N.Y.: Dodd, Mead & Company, 1925) vol. II, pp.

- (22) *Ibid.*, p.266.
- (23) *The Writings of Lafcadio Hearn*, vol.XIII, p.173-4.
- (24) *Ibid.*, pp.179-80.
- (25) *Ibid.*, p.272.
- (26) *Ibid.*, vol.I, p.180-81.
- (27) *Ibid.*, p.209.
- (28) *Ibid.*, p.213.
- (29) Rev.D.MacInnes, *Folk and Hero Tales, Wals and Strays of Celtic Tradition*, *Argyllshire Series No.II*, (London: The Folk-Lore Society, 1890) p.500.本書は同協会により、一八八九年より進められた「民間伝承古物の遺物」(Relics of Popular Antiquities)の蒐集出版の事業の一環で、アイルランド伝承文学シリーズ第二巻である。
- (30) 藤本勇訳編「教育に於ける想像力の價值」(大眞社書房・昭和二年)
- (31) *The Writings of Lafcadio Hearn*, vol.XIX, p.114.
- (32) Kazuo Koizumi comp., *More Letters from B.H.Chamberlain to Lafcadio Hearn* (Tokyo: The Hokuseido Press, 1937) p.8.
- (33) *Ibid.*, p.15.
- (34) *Ibid.*, p.24.
- (35) Sanki Ichikawa comp. *Some New Letters and Writings of Lafcadio Hearn* (Tokyo: Kenkyusha, 1950) p.14.
- (36) *The Writings of Lafcadio Hearn*, vol.XIX, pp.160-61.
- (37) Kazuo Koizumi, *op.cit.*, p.45.
- (38) *Ibid.*, p.51.

(39) *The Writings of Lafcadio Hearn*, vol.XV, pp.353-4.

(40) 『昔話の本質』(福音館書店・一九七四年)第二章、第五章、および『ヨーロッパの昔話』(岩崎美術社・一九六九年)第五章、第六章参照。

(41) 『思ふ出の記』、『小泉八雲』(恒文社・一九七六年)三十四-五頁。

(42) *The Writings of Lafcadio Hearn*, vol.XIII, p.259.

(43) 『日本理解とは何であつたか』、『新潮』昭和六十年二月号、八十一-二頁。

(44) 『定本柳田國男集』(筑摩書房・昭和三十七年)第十卷、一四八頁。『平田篤胤集』(平田篤胤・明治四十四年)第三卷参照。

(45) *Gleanings in Buddha-Fields*, p.290.

## 「追記」

加藤玄智『本邦生記の研究』の第二章第二十五節に浜口梧陵の生祠が論じられている。その中で梧陵の子擔がロンドンで講演した際、聴衆の一女性がハーン著作との関係について発言したことを紹介している。そしてその女性ステラ・ラ・ロレンツから後に浜口擔に宛てた手紙を引用しているが、その女性がこの梧陵生祠のことを聖者の遺跡と同一視していることを次のような文面が示している。

平生私は、私の心に定めた世界的聖人の目録を作つて居ります、其の中には基督教徒もありますし、佛教徒もありますし、又ペルシャ教徒もあります、…(中略)…未だ見ぬ遠い國に生れ、其の血統に於ても、其の風習に於ても、又信仰―神学者等が區別しつゝある信仰―に於ても、我々と全く異なる人種に属する彼の名は、私の聖人目録中に於て私の最も頌揚せんとする者の一人であります。(二四一頁)